

高浜市誌編さん委員会（第2回）

日時	平成29年3月22日（水）午前10時00分～12時00分		
場所	高浜市いきいき広場	傍聴人数	3名
出席者	委員	神谷純一 曲田浩和 石原順二 石川伸 村松輝一 後藤恵理 宮田克弥 中川健二 尾崎ヒロミ 神谷坂敏	
	事務局	こども未来部 文化スポーツグループ 同 同	部長 中村孝徳 リーダー 鈴木明美 主事 日吉康浩 主事 川合由希
		株式会社ぎょうせい 土屋和重	
次第	1 委員長あいさつ 2 議題 (1)委員会及び会議録の公開について（協議）【資料1】 (2)編集委員会体制(案)について（報告）【資料2】 (3)平成29年度事業スケジュール(案)について（協議）【資料3】 (4)市誌編さん業務委託について（報告） (5)収録内容(案)について（協議）【資料4】 3 その他		
資料	資料1 高浜市誌編さん委員会会議及び会議録の公開について（案） 資料2 高浜市誌編集委員会体制 資料3 『高浜市のあゆみ』発刊スケジュール(案) 資料4 『高浜市のあゆみ』収録内容（案）		

## 平成28年度高浜市誌編さん委員会【第2回】

平成29年3月22日（水）

### 1. 委員長あいさつ

【神谷（純）委員長】 曲田先生や事務局の皆さんのご努力下、編集の基本的な流れや、編集委員会にどなたが携わっていただくかといったような案がつけられた。また、市誌を発刊するまでの大まかなスケジュールについても原案をつくっていただいたので、十分ご審議をいただき、多くのご意見をいただきながら、よりよいものにしていきたい。

### 2. 議題

#### （1）委員会及び会議録の公開について

<事務局 資料1にもとづき説明>

【委員】 非公開にする場合がどのような時かということだが、プライバシーに関わる内容を取り扱う場合ということではっきりしておいたほうがいい。

#### （2）編集委員会体制(案)について

<事務局 資料2にもとづき説明>

【委員】 協力員のところで、吉浜と高取があって高浜がないが、そこは大丈夫か。

【事務局】 事業を進めていく中で補強していく。なので、今回のメンバーがすべてというわけではない。あくまで3月1日現在のメンバーということである。

【委員】 中高生の調査協力というのは、どのあたりを手伝っていただけるのか。

【事務局】 中高生が積極的に関わってほしいというのは、市の意向もちろんあるが、名古屋市立大学からもいただいている要望である。具体的には、聞き書きをする際に、その場面を中高生に映像として撮影してもらうことを考えている。これは、聞き書きの手法を映像として残した貴重な資料となる。中高生たちにも市誌編さんに少しでも関わってもらい、地域のことを知ってもらうきっかけになればと考えている。今年度まで「タカハマ物語2」を作成してくれていた子どもたちが、映画の撮影が一段落したということもあり、協力を仰いでいけたらと考えている。

【委員】 この体制表だと、近世・近代・現代の部会長が三島さんだが、括弧書きで近世・近代と書いてある。また、曲田先生は総統括者だが、ここに書いてある文言だと、

近世・近代・現代部会の部会長も兼務となっている。そうすると、部会長が2人いるということになるが、ここはどういうことか。

【曲田副委員長】 考え方としては、近世・近代の部分を三島さんに指揮してもらい、現代を私がやるということである。ただし、現代部分のボリュームがかなり多いため、3人で書き切れるかという問題があるので、近世・近代・現代という大きなくくりで、近世・近代を主に執筆する方も現代部分もカバーしていただくということを考えている。

当初は近世・近代部会、現代部会と分けていたが、3つの時代を合わせた部会にして作業をした方が有効だと考えた。ただし、部会を開くといった時に、6人全員が集まるのはなかなか難しいので、近世・近代のところで3人というグループ分けをした。6人が集まって部会を開くという時には私が統括をするので、近世・近代・現代部会の部会長としては私が引き受け、そして、6人の体制では動きづらいので、近世・近代の責任者を三島さんにやってもらうというイメージで考えている。

【神谷（純）委員長】 以前の市誌以後の記録、市になってからを中心に編集を進めたというのが基本的な編集の方針としてあるので、現代の部分が厚くなっていく。今ご説明いただいたように、現代の調査執筆員としては3名だが、曲田先生が統括して下さることで厚くなる。

【委員】 小学校の3・4年で『のびゆく高浜』を使って地域の勉強をしていく。3年生だと高浜の歴史、4年生になると自分たちの暮らしを守るといったところにもスポットが当たっていく。編さん内容として、そういった授業で活用できる内容を収録することも検討されていくと良い。

【委員】 学術的にももちろん高いほうがいいが、市民の皆さんにも読みやすいような形での編集をとることがあるので、そのあたりも考えて編集が進んでいくと良い。

【曲田副委員長】 私と事務局で編集体制をつくったが、他の市町のように、10年、15年かけて1つの市誌をつくっていくというスタイルではない。何年にもわたって、資料編、通史編と発刊する形ではなくて、今回の市誌は、1冊の中にいろんなものを凝縮していく。また、短期間やらないといけないということもあるので、高浜に近い地域の方に協力してもらうという体制をとり、稼働しやすいメンバーを集めた。

また、いくつか考えていかなければいけないこともある。それは、集めた資料をどう保管するのかということと、発刊した後どうしていくかということである。これらはまたこの委員会で議論をしていくのが良い。

【委員】 幅広い年代の方が高浜を見ることによって、新しい観光の素材が見えてきたらいいなと思う。なので今回の人選は非常によい。

【委員】 先ほど言われた、きずな実行委員会とか、中高生に関わってもらうことで、その保護者もすごく関心を持たれる。そうすると家庭の中で話も広がって、みんなに使っていただける市誌ができるのではと感じた。

【委員】 図書館では夏休みになると、地元のことを調べる子どもさんがたくさんいる。その都度資料を出して説明したりするのだが、昔のことで忘れてしまっていることがたくさんあるなど感じていたので、今回新しくつくるということは、これからの子どもたちにとってもいいことだと思う。

【委員】 本棚に入れたまま終わるのではなくて、高浜のことを知りたい、調べたいと思ったら、すぐに新しい市誌を使うといったような身近なものができるとうい。

### (3) 平成29年度事業スケジュール(案)について

<事務局 資料3にもとづき説明>

【委員】 「市誌をつくる」という行為も観光の1つになると良い。また、小冊子を定期的に作成するというのも、とても良い発想だなと思う。

【委員】 新しい市誌を使って、高浜の商業、工業の歴史だとか、そういうことを改めて確認できると思うので、大きな意義があると思う。

【委員】 高浜にはいい場面もあるが、陰に隠れた場面もある。そういうものもできる範囲で伝えていかないといけないなと思う。

【委員】 高浜に新しく引っ越してくるような方にも興味を引かれるものができるとうい。

【委員】 市誌編さん室のような部屋はできるのか。やはり専用の部屋がないと簡単に進まないと思う。

【事務局】 かわら美術館の中に使える部屋があるので、そちらを今整備中である。調査執筆員が資料を閲覧できるスペースを確保し、市誌に関連する資料を保管したりしていく。また、曲田先生にご助言いただいて、これから郷土史料館のバックヤードを、資料を掘り起こしつつ整理し直す予定である。郷土資料館では、来年度から専属で整理していただく方を置く予定でいる。

【委員】 今回、名市大の学生さんや中高生の人たちも参加するというので、すごく

裾野が広がっていくと思う。また例えば、夏休みなどに小学生高学年から中学生ぐらいに対して聞き書きの募集をかけて、体験的なこともやってもいいと思う。

それから、子どもたちはSNSやフェイスブック等で発信することも得意なので、彼らの手で体験したこと、聞き取ったことを発信できる場がつけられるといいと思う。

【委員】 資料館の見学というと今言われたように、授業で見学して、後からまたお父さんとかお母さんを連れて、こういうのがあったんだよということで訪れる方もいる。ただ、現状少し暗い感じがするので足が遠のいてしまうかなという感じはする。

お聞きしたいのだが、資料を掲載する場合、大人は大丈夫だと思うが、子どもは漢字が読めなかったりするので、そういう場合ルビはつく方向にあるのか。

他市の資料を見ると、ルビがちゃんとついているところと、ついていないところとある。大人は読めるので大丈夫だが、子どもからすると、読めない場合がある。

【事務局】 今回制作していくものは資料編というわけではないので、たくさんの古文書が載るかどうかはまだわからない。ただし掲載する場合、ルビを振るのか、書き下し文を別でつけるのかといったことは、できるだけ使う側の方のことも考えて、編集段階でまた検討していきたいと考えている。

【委員】 スケジュールを見せてもらって、編集委員さんのスケジュールが非常にハードなので、頑張ってくださいとしか言いようがないが、多分かなりボリュームがあるだろうと思う。

全体として、高浜市の今が先人たちのたゆまぬ努力があってこそという流れになってくれたらいいと思う。それと、一番最後の結び、後の資料を見たら平成22年度ぐらいを最後にしたいというのがあったが、その部分で、これからの将来というのは、今までの延長線上にはないよというようなところが書き込まれてあるといいと思った。

#### (4) 市誌編さん業務委託について

<事務局 口頭で平成29年度以降も業務委託を行うことについて説明>

※委員から特に意見なし。

#### (5) 収録内容(案)について

<事務局 資料4にもとづき説明>

【委員】 『高浜町誌』『高浜市誌』とダブるような内容はどうなるのか。調べたら、同

じことにたどり着くこともあると思うのだが。

**【事務局】** もちろん過去に発刊された市誌と内容的に重なるところもあるかと思うが、過去の市誌が発刊されて40年ほどたっているのです、その間、新しく市内から発見された資料とか、例えば、同じ資料を使っているけど過去と見方が変わっているとか、そういったところがあるので、もう一度編集し直すということである。

**【委員】** 歴史的な流れとして必要なところは重複しても書いておかないといけない。確認だが、今まで聞き書きをしてきた資料や、タカハマ！まるごと宝箱事業で発行した冊子があるのだが、これらの内容も反映してくるという考えはあるのか。

**【事務局】** 既にまるごと宝箱で調べたことで、内容的に使えるものはフィードバックさせるが、まるごと宝箱の場合は、歴史的な流れなどを意識しておらず、テーマをつまんで調べていたというところがあるので、どういった内容を反映させるかは今後調査員の方々と調整していく。

**【委員】** 第6編の「まちを語る」のところに、今までやってきたことがそのまま載るわけではないということか。

**【事務局】** 昨年、聞き書きをしたところは、あくまで瓦のみをテーマにしたが、「まちを語る」という編では、瓦以外のことも取り上げる予定である。ただし、もちろん使えるところは使っていきたい。

**【委員】** 本編の第2章に「地域の倫理」とあるが、倫理という言葉はどういう意味で使われているのか。

**【曲田副委員長】** ご指摘いただいたとおり、たしかに言葉がかたい。内容としては、今まで江戸時代以来、民間でやられていた仕事徐徐に公共に変わっていくというような、仕事をする主体の移り変わりを表現できたらと考えている。地域の活動と公的な役割の分担といったような。こういった内容が戦後のところで必要だろうと考えている。ご意見もふまえ、倫理という言葉は変えたいと思う。

続けて、資料に対する考え方などをお話させていただきたい。少なくとも30年後ぐらいまで見通して、高校生が30年前にこの事業に携わったというのを、覚えていてももらえるといい。編集の方法やプロセスも1つの資料だというぐらいの感覚で考えてもらいたい。また、内容的なことと言うと、先ほど説明があった「大家族たかはま」というところがすごく大事になってくる。ここは、皆さん、リアルタイムで今過ごされているし、平成22年ぐらいだとまだたくさんの記憶があると思う。そこは皆さんにもご協力

いただきたい。もちろん古い話も重要なのですが、「大家族たかはま」という内容が話の肝のような気がしている。もちろん市役所の方でないといけないこともあるし、どういった内容にしていくかというのは、なかなか難しい。ただし、だからこそやりがいがある。

また、高浜の郷土資料館には膨大な資料がある。行って思ったのは、郷土資料館があつてよかったということ。正直、現状は整理されていない。誰かがあの場所に資料を持ち込んで積み上げただけのような状態である。それを整理していくのは大変な作業で、編さん期間内に間に合うかどうかとも正直わからないが、今回の市誌編さんが始まったからこそ着手できたことなので、時間がかかっても取り組んでいきたい。いろいろな部分で間に合わないことについては、その後の文化財行政とか、文化行政を通して、ここで話をしたことを受けとめて進めていただきたい。編さん事業は平成32年度で終わりだけれども、それから先も大切だと思う。郷土資料館のバックヤードはかなり雑多な状態なので、かわら美術館の一室に整理した資料を持っていくという形にしたい。

それから瓦のシンポジウムの件について、高浜の原始・古代から現在までを考えると、何か1つの大きなストーリーというのか、柱があつたほうがいいのではないかと考えている。したがって、それを瓦にしたらどうかと思う。平成30年にシンポジウムを組みたいということをお願いした。そこでは瓦そのものの話だけではなくて、瓦というのはできあがるまでの工程でいろんな人が携わっている。そういった生産体制は、土地柄で、きっと自動車産業とつながるところがあるはずである。また、従業員の方がこの土地で生活をして、いろんなものを購買したり、食べたりというようなことも関わってくる。そういったことを取り上げるシンポジウムを、部会長を中心に考えていきたい。本当は29年度にやりたい気持ちもあるが、予算取り等もあるので、平成30年度を目指して、29年度はゆっくり時間をかけて議論していきながら、どういうシンポジウムがいいかということを考えていきたいと思う。

現代史は、文献と聞き書きをどのように融合させていくかということが大切なので、皆さんからもいろんなご意見をいただいて、それを形にしていく。